

1 学校教育目標
「生徒を大きく育てる西高」をモットーに、生徒一人一人と深く関わり、きめ細かい指導と支援で生徒の可能性を伸ばし、積極的に社会に参画し貢献する人材を育成する。

2 本年度の重点目標
1 生徒理解 ～ 個に応じた、個を大切にしたいきめ細かい支援 2 学力の向上 ～ ICTを活用した授業改善、自ら学ぶ力と態度を養う 3 人間的な成長 ～ 基本的な生活習慣及び社会に積極的に関わる姿勢の確立 4 自己の伸長 ～ 学校行事、生徒会活動、そして探究活動の充実 5 進路目標実現 ～ 一人一人の視野を広げ、意識を高める進路指導の推進
高校3年間で「生徒を大きく伸ばす」ために、一人一人に応じたきめ細かい指導に全職員で取り組む。特にICTを積極的に活用し授業改善を図り、生徒の主体的な学習を促進する。 また、体育的行事はじめ各種の学校行事、生徒会活動、さらに大学、企業及び地域社会と連携した探究活動等、生徒が主体的に体験する場を適切に設け、人間的な成長を図る。 教育のICT化と豊富な体験活動の両立による全人教育を推進し、進路目標の実現に結びつけ、「選ばれる学校」として地域の信頼を高める。

3 自己評価総括表						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	開かれた学校づくり	広報活動の充実と学校行事の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ 広報誌（西風、西高新聞）の内容に、学校行事の予告連絡を盛り込む。 ・ 育西会（保護者）と連携したPR活動を展開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 特に西高新聞には、発行日以降の西高内行事の日程等を掲載することで、県下の中学生や地域住民の興味関心を高める。 ・ 育西会役員等との連携を図り、オープンスクールでのPR活動や広報誌の配付等について効果的な方法を検討し、具体的に進める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校行事の予告連絡を、試験的に導入した。コロナ禍の影響がなくなり、創立50周年記念行事等で中学生に開放される校内行事が増える次年度以降は、この取組は特に重要になるので、本格的に取り組みたい。 ・ 西高新聞については、特に各中学校向けのPRのツールとして、本年度も大きな効果を発揮した。また、PTA広報誌（西風）は、生徒の活動を中心とした誌面で、計画的に発行できた。 ・ 育西会と連携したPR活動に関しては、オープンスクールにおける中学生保護者対象の質問ブースを今年度設置したが、設置箇所や時間帯を工夫したことで、4件の質問相談を受け、じっくりと対話ができた。
		西高の魅力発信の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・ HPやSNS等を通じた情報発信を積極的に行う。 ・ 行事等の記録（写真・動画）を細やかにとり、学校HP、SNS等を通じた情報発信のデータコンテンツを充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ Web上で生徒の諸活動を随時写真入りで発信し、特に中学生に対し西高での充実した学校生活をPRする。また、全職員が年に1回はHPの原稿作成に携わることで、より多角的な視点からPRを拡充する。 ・ 生徒の諸活動を写真入りで発信し、中学生や中学校、地域社会へインパクトのある情報発信を進める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各科・コースや部活動の取組を中心に、HPやインスタグラムの更新頻度を高めた。HP全体の内容リニューアルに向けて、情報の整理を行っていく。 ・ 全職員に年に1回はHPの原稿作成に携わるようお願いをした。例年より多くの先生方にHPの原稿作成に携わっていただき、多角的な視点からPRすることができた。今後は、行事以外の日常の学校生活についても発信を行い、西高や西高生の生き生きとした姿をさらに発信していく。 ・ 諸行事の写真や動画等の記録は、可能な限り撮影し、写真保管庫に保存することができた。各分掌における広報活動におけるデータベースとして利活用することができた。個人情報保護と情報発信の活性化の両面から発信方法等について検討を進めていく。
		地域とつながり、地域に選ばれる学校づくり	異校種間の連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 高大、中高、小高連携の取組を通じて、本校の魅力創造・発信を推進する。 ・ 参加した生徒の達成感、自己肯定感に繋がるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ NAIS事業、大学連携事業等を継続実施する。 ・ コロナ禍により途絶えていた中高連携、小高連携について探究学習を踏まえて実施し、その成果を外にも発信する。 	B

					<ul style="list-style-type: none"> ら高い評価を得た。また、コロナ禍で途絶えていた近隣小学校との「ふれあい教室」を再開することができた。 探究学習において近隣中学校と連携するなど、連携を深めることができた。今後は中学校との部活動連携を充実させていきたい。
	生徒募集の工夫	<ul style="list-style-type: none"> 近隣中学校はもとより県内の中学校と「顔の見える関係」を築き、本校志望者を増やす。 	<ul style="list-style-type: none"> 定期的に各中学校を訪問し、本校の最新情報を掲載した西高新聞を配付したり、中学3年担任等と情報交換を行ったりする。 HPの各学科・コース紹介ページを整理し直して、その特色がわかりやすい形にする。その他の新着情報の更新も機を逃さず行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度と比較すると中学校への定期的な訪問はできなかった一方で、学校説明会には昨年度より多くの中学校から招かれ、本校の魅力を発信することができた。 近隣中学校と連絡を密にとり、オープンスクール、学校説明会の日程を検討した。また、本校の新聞等について、生徒がよく見る場所に掲示してもらえるよう依頼し協力いただくことができた。 HPの各学科・コース紹介ページについては、大幅に改善する必要がある。今後は校内でレイアウト変更や更新が定期的にできるようにしたい。
	地域との連携	<ul style="list-style-type: none"> 地域の方々と連携した活動を通して、西区の西高としての存在意義を高める。 生徒が地域に貢献することで、生徒自身の自己有用感、自己肯定感を高める。 地域探究の活動などの西高独自の学習活動を通して、地域に、西高の教育環境の魅力を発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 探究活動による地域連携事業を推進し、その成果報告を地域に向けて行う。 地域の中学校との部活動交流や各種団体とのボランティア交流を積極的に復活させ、生徒の達成感、自己肯定感を高める。 文化系部活動の発表の場を地元地域に求めていく。 地域探究の活動から「カラス・ハト被害を防ぐ研究」など選び、育西会（保護者）、地域住民、西区役所、中学生等に紹介する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 2学年の地域探究では、地域課題の解決に向け、地域の機関や事業所等と連携・協力した取組が実践された。発表会においては、地域運営協議会メンバーの方々に見ていただき、西高生の頑張りを評価していただいた。また、生徒ホールに発表ポスターを展示し、来校者にも見ていただいた。 部活動や各種のボランティア活動を通じて、西高生が地域の中学校や各種団体と交流する機会は増えている状況にあり、西高生にとって学びの多い活動となった。今後も、生徒の達成感や自己肯定感を高めることができる取組を進めていく。 文化系部活動の発表の場について、地域の関係者の方々と検討を進めたが、場所や時間の調整ができず実施に至らなかった。今後は、早期から相談を進め、実施につなげていく。
業務改善・働き方改革	ICT等を活用した業務改革	<ul style="list-style-type: none"> 一人一台端末を学校職員全体で活用し、業務の改善に取り組む。 保護者とのコミュニケーションツールとして学校保護者間連絡システムを活用する。 	<ul style="list-style-type: none"> 職員会議等の資料を原則ペーパーレス化し、印刷や書類の整理に係る負担を軽減するとともに資源の節約を行う。 学校保護者間連絡システムを各学年・クラスの連絡や行事の配信等で活用する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 各部会も含め職員会議等の資料について、原則ペーパーレス化を実現し、金額ベースで約10%の紙使用量の節約を行うことができた。 今年度途中より新たに学校保護者間連絡システム「すぐーる」を導入した。今まで利用していた Google classroom とそれぞれの良さを生かしながら学年やクラスの連絡を行った。さらに有効な利活用の方法について検討を進めていく。
	働き方改革の推進	<ul style="list-style-type: none"> 業務負担の平準化と職員の働き方改革に係る意識の変容を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校閉庁日及び定時退勤デーを設定する。 安全衛生委員会を通じて、細やかな面談や助言を行うとともに、主任主事による各分掌の状況把握を行い、適正な業務分担を進める。特に主任・主事や負担が偏っている職員が行っている仕事において、他の部員ができる部分を洗い出し、仕事の平準化を進める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 学校閉庁日については、今年度は1日増やし5日間設けた。また、定時退勤デーについては、定期考査ごとに設けることができ、職員も概ね定時で退勤することができた。 安全衛生委員会においては、今年度より職員代表の職員を各学年代表から各部代表に変更した。業務分担の改善に向け、各部が抱えている課題の共有を図ることができた。 特に、時間外勤務時間の超過が著しい職員が所属する部の主任・主事との面談を実施し、業務負担の平準化について検討を進めた。時間外勤務時間については下げ止まりの状況であり、働き方改革に係る意識の向上と方策の検討を図っていく。

学力向上	わかる授業魅力ある授業への転換	授業による学力向上	<ul style="list-style-type: none"> 授業内容の一層の改善を図り、基礎的・基本的な学力の定着を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業旬間を利用し、他教科にも学びながら、学習習慣の定着や基礎的・基本的な学力向上に係る取組の共有を図る。 「いつでもどこでもオープン授業」と称し、他の先生方の授業を参観しやすい環境を整備する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 研究授業旬間を実施し、他教科に学ぶ視点を持った参観を促した。引き続き学習習慣の定着や基礎的・基本的な学力向上に係る取組の効果について検証を進めていく。 日常的に授業を参観できる雰囲気醸成や体制づくりが今後の課題である。
		I C T 等を活用した授業改革	<ul style="list-style-type: none"> 一人一台端末を教育活動の中で日常的に活用する。 [指標：くまもと I C T 指数] Class-KI 3 0 (授業時間の 3 0 % の活用) 及び Unit-KI 5 0 (単元時数の 5 0 % の活用) 	<ul style="list-style-type: none"> 教科の特性に応じ端末の利活用目標を設ける。 各教科で端末を用いた「主体的で対話的で深い学び」を実現するための活用例を共有しその成果について検証を進める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 1 2 月に調査した Unit-KI において教師活用 7 3、生徒活用 3 1 の調査結果を踏まえて、教員に対し、基礎的な活用についての学び直しを行う研修を実施した。引き続き、生徒の学習活動での活用法について研究・共有していきたい。 教科内で実践している I C T を活用した「主体的で対話的で深い学び」に関する実践事例を教員間で共有する研修を実施した。
	計画的な学習指導の充実	計画的な学習指導と適正な評価	<ul style="list-style-type: none"> 観点別評価を意識し、単元テストや定期考査の出題内容を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学期ごとに、各教科内で実践事例を報告し、2 学期には、教科の枠を超えて情報交換できる場を設ける。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 2 学期までに教科の枠を超えた情報交換の場を設定できなかったため、次年度の取組につなげるべく早期の実施を目指す。
キャリア教育(進路指導)	キャリア教育	ポートフォリオの充実	<ul style="list-style-type: none"> 生徒のキャリアを着実に積み上げ、多様な入試に対応する。 	<ul style="list-style-type: none"> セルフチェックノート等によるポートフォリオを通して振り返りながら、生徒の主体性を伸ばさせる。 各学年の進路研修会を充実し、異学年の会への参加を呼びかけるなど全校で情報を共有する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 進路指導に係る諸活動で記録を残すことができおり、大学等の入試においてポートフォリオの主体的な活用に繋がっている。 進路情報については更に積極的に共有する場を設け、多様な入試に柔軟に対応できる体制づくりを進めていく。
	一人一人の進路目標達成	進路実績	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度を上回る進路実績を実現する(進学 1 0 0 % 決定・国公立大学 1 5 名・公務員指導の充実・就職 1 0 0 % 決定)。 	<ul style="list-style-type: none"> 全職員による進路指導の充実を図り、進路相談、面談を計画的に設定するとともに、必要に応じて柔軟に実施する。 個別指導・面接指導・学力検討会を充実させる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 現 3 年生は学力面で心配されたが、家庭の理解と協力、生徒と教師の信頼関係のもと、個に応じた丁寧な指導等を行うことができ、順調に進路保障に繋がった。今後は、現 3 年生の 3 年間の取組を検証し、次のサイクルや現 1・2 年生の進路実現に向けて、指導や支援の具体的な方策について検討を進めていく。
		進路意識の涵養	<ul style="list-style-type: none"> 夢や希望を与える取組を実施する。 アカデミックインターンシップ(N A I S) 及びインターンシップを充実させる。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本や熊本で活躍する人による講演会を実施する。 生徒の適性を考慮した N A I S 及びインターンシップを実施する。 地元企業や同窓会と連携し幅広い受入先企業の開拓を進める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 生徒・職員共に、概ね学校評価アンケートでは、高い評価となっている。N A I S やインターンシップの内容改善を進め、西高生に夢や希望を与える取組づくりに向けて今後も検討を進めていく。 部や学年にまたがる業務が多く調整や準備にかなりの時間とエネルギーを要しており、教員の負担感の軽減が課題である。
生徒指導	交通安全	交通事故・マナー違反をなくす	<ul style="list-style-type: none"> 重傷事故ゼロを含め、交通事故及びルール違反(ながらスマホ等)の減少に努める。 万一の事故時の対応や被害の最小化(ヘルメット着用)に繋がる意識の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 毎月 1 1 日を「交通安全の日」とし、警察・育西会・交通委員で交通指導を行う。 交通安全集会や交通委員との取組や広報等を通して、ヘルメット着用の重要性を呼び掛け、着用への意識向上を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 交通事故(自損事故含む)は 1 2 月末現在で 3 2 件あり、そのうち乗用車と自転車の接触事故が過半数を占めている。令和 5・6 年度は県教委の「学校安全教育研究推進校」の指定を受けており、生徒の交通安全に対する意識や事故の実態をより正確に把握・分析し、生徒の心に訴える交通安全指導に努めていく。 熊本市からヘルメット 5 0 個の提供を受け、生徒にヘルメット体験を 3 回(のべ 1 2 7 名)実施し、啓発活動を行った。育西会の協力で購入する際の助成金支援(2 千円)や購入販売店の拡大もできた。 育西会による学期 1 回の交通指導を行った。保護者の目から見た登校状況の確認や保護者の交通安全への関心を高める効果があった。
	基本的な生活習慣の確立	時間厳守 爽やかな挨拶 正しい着こなし	<ul style="list-style-type: none"> 挨拶励行、時間厳守、整容面について、生徒の主体的な取組を通じて、それらの徹底を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒会・職員による登校指導や挨拶運動を行う。 一斉形式の服装頭髪指導の回数を減らし、風紀委員と連携しながら不備者を減らす。 	C	<ul style="list-style-type: none"> 生活習慣の乱れや規範意識の低さが影響した事案が多発した。そのため、指導が後手に回り、落ち着いた雰囲気を作り未然防止のための環境づくりがうまくいっていない現状にある。また、

				<ul style="list-style-type: none"> ・昨年同様、校則の見直し（改善・簡素化）を計画的に進める。 		<p>アンケート結果から、生徒指導に関する生徒と保護者の評価と、職員側の評価にずれがあることが課題である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校則の見直しについては生徒会・育西会と連携して、現在取り組んでいる最中である。学期1回、生徒会と育西会の意見交換会を開き、校則等に関して生徒に加え保護者の目線の意見を引き出すことができている。
	主体的・能動的言動の育成	各行事における生徒の自主性の育成を図り、高い志及び目標を持った高校生活実現の支援（プラスワンの指導）	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒が主体となった行事の企画と運営を進める。特に、創立50周年記念事業に向けて、生徒の自主的なアイデアと実行力を涵養する。 ・生徒が常に目標とやりがいを持って、学校生活を送る支援を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体育大会や創立記念祭、クラスマッチにおいて、行事前後のアンケート活用などを通して、生徒会を中心とした生徒主体の取組に移行する。 ・全職員による様々な場面でのPDCAサイクルを意識した声かけを通して、生徒がいきいきと諸活動に取り組む支援を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・各行事に向けて、生徒会執行部を中心に主体的に取り組むことができた。Google Formsを利用して校則や学校行事に関するアンケートを実施したり、50周年記念講演会の講師依頼の手紙を作成したりするなど、例年になく活発な活動ができた。執行部生徒の意欲を土台に、今後はそれらを具現化させる指導者側のスキルを磨いていく必要がある。
	美化、環境意識の高揚	掃除への意識高揚、環境ISOの取組推進	<ul style="list-style-type: none"> ・週3日の掃除を徹底し、校内美化に努める ・生徒と共に、「学校版環境ISO」の取組を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・掃除箇所や担当の割り振りを常に見直し、掃除指導の徹底を図り、学期に一度美化コンクールを実施する。 ・節電（移動教室時の消灯）や節水を生徒会と連携して進める。 	C	<ul style="list-style-type: none"> ・美化コンクールにおける取組状況は良好である。一方、日々の掃除態度や教室の消灯状況を見ると、日常の美化・環境への意識・行動面に課題がある。また、アンケート結果から、掃除に関する生徒と職員の評価にズレが生じている。
人権教育の推進	職員研修の充実	人権教育の基本的認識の確立とその共有	<ul style="list-style-type: none"> ・校内研修を充実させる。特に特別支援教育についての研修を拡充する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人権や命の問題についての知識や考察を深める職員研修の充実を図る。 ・合理的配慮についての研修を行い、個別の配慮について周知する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒理解研修を行い、生徒についての共通理解を深めることができ、対象生徒に対する支援を細やかに行うことができた。課題を抱える生徒は増える傾向にあり、さらに組織的に対応を進めていく必要がある。 ・合理的配慮を要する生徒への職員の理解を深めるため「発達障がい者支援センターみなわ」から講師を招き、発達障がいについての理解や対応について理解を深めることができた。 ・個別の支援計画に基づいた指導及び生徒の状況に応じてSC・SSWと連携して対応することができた。
	命を大切に する心を育 む指導	自尊感情及び他者を尊重する態度の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・命を大切にする心の育成の充実を図る。 ・生徒および職員の心身のストレス軽減を図る。 ・担任の先生が専門家から直接アドバイスを受ける機会を設ける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・人権教育やソーシャルスキルトレーニングを充実させて自尊感情を高めるとともに、「SOSの出し方に関する教育」を各学年ともに実施する。 ・ストレスマネジメントやリラクゼーション等の知識や技能についてカウンセリングを通じて啓発する。 ・西高コミュニケーションサークル（NCC）を実施し、ソーシャルスキルの向上を図る。 ・担任のコンサルテーションを行い、配慮を要する生徒への支援力向上を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・1・2年生では学年全体でソーシャルスキルトレーニングを実施するとともに、機会を捉えて人権教育主任からの講話を実施することができた。 ・生徒間のコミュニケーション能力育成のため、SCによるアサーションについての授業を実施し、ストレスマネジメントやアサーションについて生徒に啓発することができた。 ・SCやSSWとの面談後には担任とのコンサルテーションを実施し、助言をいただく機会を設け、担任への支援を実施することができた。
いじめの防止等	人権意識の育成	いじめをしない、許さない心の育成	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめ解消率100% ・外部専門家を含めたケース会議を行い、生徒支援に当たった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本校いじめ防止基本方針に従い、未然防止および早期対応を着実に実行。 ・本校独自の「こころのアンケート」を実施と活用を進める、 ・SC、SSW、医療機関等との積極的な連携と情報交換を図り、職員・保護者の生徒理解と支援の充実を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめの訴えに対して、学年が中心となり、管理職も含めて組織的に連携して対応することができた。いじめとして認知した事案については、ほぼすべて解消を図ることができている。各事案をみるとコミュニケーション能力が低かったり、人間関係の構築できていなかったりすることで発生した事案が散見される。今後は生徒のコミュニケーション能力や人間関係の構築力をより一層の育成する必要がある。また、いじめに係ることも含め、引き続き「声なき声」を細やかに拾える環境づくりに努めていく。 ・1学年では、クラスにおいていじめをしない、許さないクラスの風土醸成のための標語作成を実施することができた。

						<ul style="list-style-type: none"> 入学前面談を実施し、1年間SSWとの面談を実施した結果、学校生活や家庭での課題に迅速に対応することができた。また、SC面談を通して医療機関につながることができた。
地域連携 (コミュニティ・スクールなど)	地域・保護者・関係機関等との連携	学校運営協議会の活用による地域連携の強化及び円滑化	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会による学校評価や魅力化、活性化に向けた取組の検証及び地域防災体制の強化を図る。 地域防災体制の充実に貢献する。 	<ul style="list-style-type: none"> 学校運営協議会の高大連携、中高連携、地域連携の3部会体制を推進する。年2回の全体会開催と各部会を開催する。 地域の方々と連携した防災・減災訓練を実施する。 生徒個人の防災力を高めるためICTを活用した防災・減災訓練を実施する。 生徒募集に関する地域や保護者から得た意見・助言を募集活動に生かす。 地域の方々と連携した防災・減災訓練を強化する。 探究活動のテーマとして地域防災を主眼とした研究班をつくり、西区の地理や気候条件等を考慮した地域防災のあり方などを研究する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度に続き、学校運営協議会の3部会を実施し、各部会で貴重な意見をいただき学校の魅力創造・発信の参考となった。なお、部会体制の課題も見えてきたので、3年目となる次年度は更なる進化を目指して、職員の負担軽減の視点も含め再構築を検討する必要がある。 「地域連携」部会では、生徒の避難訓練に対する意見、災害時の避難所としての学校施設設備に関する意見、生徒たちの災害時の対応能力等に関する意見を得ることができた。 地学基礎の授業において、自宅周辺のハザードマップ作成を行った。ICTを活用した防災等の取組は他教科でも実施可能であり、地域防災について探究的な活動の中で校内の防災・減災意識の高揚に繋げていきたい。
特色ある教育	サイエンス情報科の充実	研究活動の充実 志望者の増加	<ul style="list-style-type: none"> 高大連携による実習などサイエンス情報科の活動を着実に実施する。 発表会、コンテスト等への出場を増やす。 特色的な教育活動を積極的に中学校や地域へ発信する。 	<ul style="list-style-type: none"> 大学との事前協議を綿密に行うなど活動の充実を図り、外部への積極的な情報発信を行う。 課題研究の進め方の改善や講座内容の調整を行い、発表会やコンテスト等への出場機会を増やす。 サイエンス情報科体験プログラムを実施する。 学校説明会等において地域へのサイエンス情報科の魅力を理科、数学、情報の担当者と連携し、より効果的な発信を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 高大連携による実習は、日程調整の難しさがあったが、関係大学との調整を丁寧に行い、滞りなく実施することができた。 1年生では、課題研究を円滑に進めるため、理科、数学、情報の各分野でミニ講座を行った。2年生では、校内でプレゼン発表を行った班のいくつかが科学展に出品した。 オープンスクールにおいてサイエンス情報科体験プログラムを実施した。多数の中学生が参加してくれ、科の魅力を発信することができた。 学校説明会の資料について、各科目の実習が1年間の流れで分かるよう、科の魅力化の視点で改良した。また、科の紹介用のチラシを新たに作成して各中学校に配付できた。
	体育・スポーツコースの充実	専攻授業・実習の充実 志望者の増加	<ul style="list-style-type: none"> スポーツを「する・みる・しる・ささえる」という観点から自己研鑽に努め、将来、指導的役割を担う人材の育成を目指す。 スポーツ活動を通して「知育」「徳育」「体育」のバランスのとれた教育活動を実践し、志望者数の増加を目指す。 	<ul style="list-style-type: none"> スポーツを多角的視点で分析する力を養うなどスポーツを科学するという取組を大学や地域と連携し、探究活動を充実させる。 生徒が体験する場を設け、主体的な学習を促進する。 小中学校や地域スポーツクラブとの交流を進めるとともに、大会役員ボランティア等に積極的に参画する。 志望者数の増加に向けて、体育・スポーツコースの魅力発信のため広報活動を充実させる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 昨年度から始めた保健科学大との連携は、「スポーツを科学する～専門知識の習得と実践力、幅広く共有できる人材の育成～」をテーマに各学年別の実習を行った。1年生では「スポーツ医科学の基礎」、2年生では「筋肉を科学する」をテーマに実施した。 実習について、1年生（基礎の習得）、2年生（実践）、3年生（まとめ）の3カ年の流れを作ることができた。この成果を次年度の全国大会の発表に繋げたい。今後、更に細かな連携体制を構築していく。 専攻6種目による近隣中学校との合同練習や中学校の大会会場として施設提供した。また、11月から各専攻担当職員による中学校訪問を実施しコースの魅力発信を行った。
	普通科の充実	取組の質的転換	<ul style="list-style-type: none"> 一人一台端末を活用した主体的で対話的で深い学びへの転換を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な学習成果を融合させて、新たな視点や取組を生み出す機会を増やす。 理数探究基礎や総合的な探究の時間等を活用し、文章作成やプレゼンテーションなど、情報活用能力を生徒に身に付けさせ、発信力を高める。 主体的で対話的で深い学びを意識した一人一台端末活用の事例を各教科から報告し、情報を共有することで、自分の教科の授業改善を進める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 特進クラスを中心に、熊本県立大学、崇城大学等との高大連携を進め、探究的な学びの深化を図ることができた。 1年生は理数探究基礎において、ICTの活用やプレゼンテーションに係る技能の育成を図った。2年生は総合的な探究の時間において地域探究を進め、12月の「県立高校学びの祭典」にて25グループがポスター発表を行った。 主体的で対話的で深い学びを意識した一人一台端末の活用の事例について、国語科と地歴科の取組を代表事例

						として校内で共有し、また県にも報告した。今後はさらに他教科へ取組を広げる必要がある。
感染症対策	感染症への対策	感染症拡大防止対策	<ul style="list-style-type: none"> ・校内体制の充実を図り、日常的な感染未然防止の指導を適切に進める。 ・新型コロナウイルス感染症が2類から5類への変更となったが、身に付けた知識を基に適宜、感染予防の対策を行うと共に、健康環境について自己管理できる生徒を育成する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・感染拡大の状況に応じて、オンライン授業などICTを活用した教育活動を進め、学習の遅れがないよう支援する。 ・新型コロナウイルス感染症等の今後の感染状況に応じて、生活の心得を適宜改訂する。 ・生徒会や保健委員会などの活動を通して、生徒による健康環境の自己管理能力を高める。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・校内の感染拡大傾向を初期段階で把握して、計5クラス学級閉鎖を行い、感染拡大を防止することが出来た。 ・学級閉鎖時は、ICTを活用して健康観察や学習支援等を行い、教育活動の継続に取り組んだ。日常生活において、コロナ禍での経験をベースに換気や手指消毒等の呼びかけを適宜行った。 ・体育館での集会や学校行事の実施方法選択等、感染未然防止対策、校内や地域の状況把握、各生徒への丁寧な対応等を行った。

4 学校関係者評価

地域住民、行政、教育関係、保護者等の立場から幅広く意見をいただいた。

(1) 本校の教育スローガン等について

- ・「西高で自分の可能性を伸ばし、夢を実現」の達成に向けて、5つの重点目標を設定しており、熊本西高校の先生が多方面にわたり多くの施策を実行していることを実感している。多様な対応を求められる中で、現実的な課題対応と目標達成への施策実行を進めていかなければならない高校現場の困難さを共感した。(大学)
- ・熊本西高校は先生方のきめ細やかな指導と支援で在校生・保護者の満足度も高い学校であると考えている。(大学)
- ・部活動も地域貢献も盛んであり、特に熊本市南西部に在住している中学生にとっては目指したい学校の一つになっている。(大学)
- ・現行の公立高校入試や現在検討が進められている入試改革の内容からすると、熊本西高校の生徒募集はますます厳しくなると感じている。(大学)
- ・ここ数年の入試結果から推察すると、前期選抜で不合格だった受検生が、後期選抜でもう一度熊本西高校をチャレンジするような取組が求められる。(大学)
- ・入学志願者が充足していない課題について、地域にある県立高校ということもあり、中学校としても何とか盛り上げたいと考えている。そのことも含めて、さらに積極的に中学生に向けて発信を強化してもらいたい。(中学校)
- ・熊本西高校から地域への情報発信は、過去数年にわたり取り組まれており、十分にその結果が出てきているように思う。(地域)
- ・地域としても、熊本市西区の「熊本西高」と称えられるよう今後も協力していきたい。(地域)
- ・育西会(PTA)としては、保護者間の口コミで入学志願者の増加に寄与できればと考えている。(保護者)

(2) 生徒指導、学習指導、進路指導等について

- ・地域の人材として活躍してくれることを期待している。人材を育てる観点からもインターンシップ等での学校との連携を深めていきたい。(行政)
- ・学力の充実はもちろんのこと、様々な取組があり活気を感じている。(中学校)
- ・地域と連携した防災訓練について、これまでと比較し全般的に改善が見られた。(地域)
- ・自転車通学生に対する指導をさらに徹底してもらいたい。(地域)
- ・交通マナーに係る指導も大事であるが、まずは基本的な社会規範を遵守することから改めて考えてもらいたい。(地域)
- ・生徒から通学路におけるヒヤリハットを収集し、分析のうえ指導に繋げて欲しい。ヒヤリハットの件数を減らすことが重大事案を減らす安全対策になる。(地域)
- ・文化部、運動部いずれも好成績を収めており、登下校中の挨拶も運動部を中心によい。(地域)
- ・「基本的生活習慣の確立」、「主体的・能動的な言動の育成」は多くの取組の中でも重要である。(地域)
- ・総合的な探究の時間の取組は、中学校と比べると様々な可能性を秘めており、学校の魅力としてもっと発信してよいのではないかと思う。(中学校)
- ・「C」評価のうち、基本的生活習慣の確立や美化、環境意識の高揚の2点について、大変心配している。家庭教育によるところ大きいと認識している。(保護者)

(3) 地域や異校種等との連携について

- ・地域のボランティアに積極的な参加が顕著で、引き続き地域との連携をお願いしたい。(行政)
- ・今後のまちづくりにおいて、若い世代の意見を求めたいと考えており、ワークショップ等の参加もお願いしたい。(行政)
- ・学校の様子や状況を積極的に保護者や地域に発信する手段を、さらに工夫する必要がある。(中学校)
- ・学校行事や学校外での活動の際は、事故の防止等も含めて対応しやすくなるため地域にも知らせてもらうとありがたい。(地域)
- ・地域とコラボレーションした探究活動は、反響が大きかった。(地域)

5 総合評価

(1) 学校教育目標

「生徒を大きく育てる西高」として、新型コロナの5類化に伴って精選を進めながらではあるが、各種取組を本格的に再開させた。西高アカデミックインターンシップや体育大会・創立記念祭・チャレンジウォークなど、生徒の可能性を伸ばすための各種取組は、生徒会を中心に職員・育西会(保護者)・西峰会(同窓会)・外部機関等が連携し、充実したものとなった。アンケートにおいても、生徒や保護者も比較的高い評価を得ている。また、生徒の夢や目標を実現する世界的視野に立った人材の育成という点では、修学旅行において熊本の地を離れて視点を変えて物事を見る力を養ったり、県指定イノベーションハイスクールや探究活動等の取組において他校生や地域との交流を活性化させたことで他者とのつながり方を身に付けたりした生徒が増え、各自の進路志望に繋がっていると考えている。

(2) 重点目標

- 1) 「生徒理解～個に応じた、個を大切にしたいきめ細かい支援」については、職員の「様々な場面で生徒に対しての声掛け、励ましを行っている」の項目が過去3年間で一番高かった。一方で、保護者からの評価は過去3年間で一番評価が低く、保護者との連携や情報共有が課題となっている。
- 2) 「学力の向上～ICTを活用した授業改善、自ら学ぶ力と態度を養う」では、ICTの活用という点において職員の評価は上がっている。一方で、生徒と保護者の評価はそうではないことから、ICTを活用した授業で生徒に充実感や達成感をより感じてもらう取組、また授業改善の状況を保護者や地域の方に知ってもらい、理解してもらう場面設定が必要である。
- 3) 「人間的な成長～基本的生活習慣及び社会に積極的に関わる姿勢確立」では、「生徒指導(挨拶、時間を守る、服装等)は適切である」の項目について、生徒・保護者の評価が低い状況が続いており、職員の意識とのずれが懸念される。昨今の校則見直しの動きを活用し、生徒や保護者との対話を重ねていく必要がある。

4) 「自己の伸長～学校行事、生徒会活動、そして探究活動の充実」では、NAIS等の取組について生徒は高い評価である一方で、異校種との連携や生徒会主催行事等への参加に係る項目で生徒の低い評価が続いており、生徒が主体的に取り組む学校の雰囲気や資質の育成が課題である。

5) 「進路目標実現～一人ひとりの視野を広げ、意識を高める進路指導の推進」では、生徒及び職員の本校キャリア教育への評価が高い水準で推移している。一方で、保護者からの評価は下がっており、保護者への情報発信や保護者を巻き込んだ進路企画が求められている。

(3) 自己評価総括表

「学校経営」では、「開かれた学校」、「地域とつながり、地域に選ばれる学校」をつくっていくにあたり、地域や異校種との連携、本校からの魅力発信の工夫改善を進め、オープンスクールや中学校説明会等の生徒募集に係る取組も戦略的且つ組織的に行うことができた。しかし、受検者数の増加に繋げることができず、見直しを進める必要がある。また、業務改善のうち「働き方改革の推進」については、時間外勤務時間が下げ止まりの状態となっており、これまでの取組を踏まえつつ、教職員の業務負担の適正化を進めていくための方策を打ち出していく必要がある。

「学力向上」では、ICTを活用した「主体的で対話的で深い学び」について教科内での情報共有にとどまる傾向にあるため、他教科や他校での実践を学ぶ機会の創出が今後の課題である。また、観点別評価を導入して2年目になるが、設定した評価方法の課題が見えてきている。そのため、教科の枠を超えた情報交換の場づくりを早急にすすめ、本校としての適正な評価について研究を進め改善を図っていく必要がある。同様に、「キャリア教育」に係る取組についても、現在の取組について検証を進め、3年後やその先を見据え体系化を進める必要がある。

「生徒指導」では、今年度、交通事故をはじめ問題事案が増えた現状を踏まえ、危機感を感じている。特に、生徒の生活習慣の乱れや規範意識の低さに起因すると思われる事案が多い。保護者との協力体制の構築、そして生徒との積極的な対話の場づくりと学校組織として生徒への細やかで継続的な指導・支援の実践について、検討を進めていく。

「人権教育の推進」においては、引き続き学校の指導や支援に対する理解を深めるとともに、主体性や自他を尊重する態度の育成など生徒の成長を支える体制構築が急務である。特に「いじめの防止」については、本校においてもケースの複雑化や多様化が見られ、未然防止と早期対応できる組織づくり及び教職員の資質向上に向けた研修の強化が必要である。

「特色ある教育」では、サイエンス情報科やスポーツコースにおいて、科・コースの活動の拡充が進み、特に高大連携においては魅力的な取組が体系化されつつある。今後は情報発信と小中学校や地域との連携した取組がさらに求められる。普通科においては、ICTの活用や探究活動を中心にして生徒の発信力を高め、様々な学習を融合させて新たな視点や取組を生み出す機会や場面を増やすよう努めた。今後はこれらの各種取組を生徒の進路実現等に効果的に結びつけられるよう関連性や順序性について研究する必要がある。